

上手な読書感想文の特徴とはなにか

——八王子市読書感想文コンクール応募作品の分析から——

飯 尾 淳

目 次

1. はじめに
2. 先行研究
3. 仮説設定
4. 分析の手順
5. 分析結果と考察
6. 作業で明らかになった課題
7. おわりに

1. はじめに

「読書の街」を標榜する八王子市では、毎年、市内在住・在学の小中学生を対象とした読書感想文コンクールを、東京八王子西ロータリークラブと八王子市教育委員会の共催で実施している。平成24（2012）年に開始された同コンクールも、2018年で7回目を迎えた。市内にある小中学校の児童・生徒から多数の応募があり、毎回、約4千通もの応募作品が寄せられている。同コンクールの実施は、同市における国語教育の一部として実施しているだけでなく、児童・生徒の読書活動を振興することを目的としている。

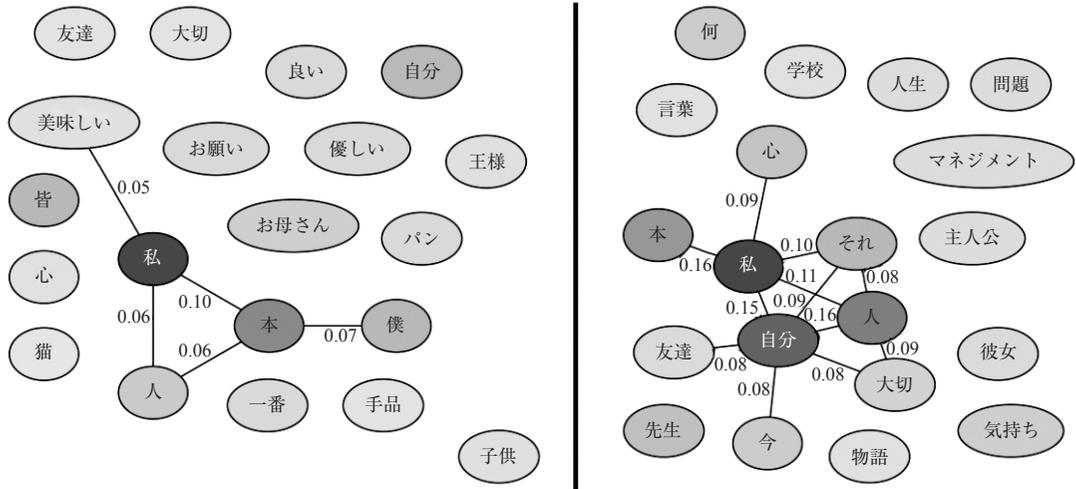
また、中央大学は、2017年に八王子市との包括連携協定を締結した。その一環として、八王子市図書館と中央大学文学部は2017年7月1日より共同研究を進めている。現在のところ、共同研究のテーマは1. 図書館が収集した各種データの分析、2. 読書感想文コンクール応募作品の分析の2つである。本論文では、同共同研究で遂行された後者のテーマに関する分析の一部をまとめた。なお、

同研究はまだ研究の端緒についた段階である。したがって、本論文はその途中経過を報告するものであることを予めお断りしておく。

ところで、八王子市が実施している読書感想文コンクールは、小学校低学年（1年生から3年生まで）の部、小学校高学年（4年生から6年生まで）の部、および、中学校の部の3つの階層に分けられている。それぞれ、学習の進度に応じた審査が行われるが、本研究では、まず、中学校の部を対象とすることとした。事前の予備実験として、2012年の入賞作品（10作品）を対象とした共起ネットワーク図（詳細は後述する）を描いて分析したところ、語彙の獲得状況や文章作成能力に関する成長を明らかにすることができた（図1）が、その結果から内容の分析に関しては低学年では差が付きにくいのではないかと判断した。図1をみると明らかに、中学生になると語彙を獲得しているだけでなく、複雑な記述もできるようになっていることがわかる。

現在、読書感想文コンクールの実施において、大量の応募作品を審査する体制はボランティアベースの人海戦術で実施している。本研究の最終目的は、読書感想文の良し悪しを可能な限り自動的に判定することによって、その作業を省力化することである。方法として機械学習による判別器の生成まで視野に入れて検討しているが、実現にはいくつか解決しなければならない課題（飯尾2017）がある。本研究は、まず上手な読書感想文とは何か、その評価基準を策定する予備的な研究

図1 小学校低学年の作品分析（左）と中学生の作品分析（右）



として、審査員により高い評価を得た読書感想文と低評価の読書感想文を比較し、特徴を明らかにするものである。

2. 先行研究

国語教育における読書感想文指導は、その指導方法を中心としてこれまで数多くの研究（成家 2013, 門島 2017 など）が進められている。指導方法に関する研究だけでなく、小学校（船津 2012）から高等学校（岩田 2018）までの事例、さらに地理的条件を考慮した例（野口幸司 2017）など、様々な状況での実践事例も報告されてきた。また、読書感想文のみを対象にして研究するだけでなく、その背景となる読書活動まで広げた効果的な読書教育や、さらには学校図書館のあり方にも関連付けた研究報告（川北ら 2010 など）も多い。

野口久美子（2009）は、全国学校図書館研究大会参加者による実践報告や議論の記事を対象として、包括的なサーベイを行った。野口は、これらの資料をもとにして、小中学校の教職員による読書指導の実践に関する考え方や実践内容の特徴、傾向の推移を明らかにした。その結果、わずかな時間を利用してでも読書指導ができることの認知

が進んだこと、読後活動よりは「読書の楽しさ」を知り「読書そのものに向き合う」ことに重点が置かれるようになったこと、課題読書よりは自由読書が重要視されるように変化してきたことなどを指摘している。

一方で、本研究のように、読書感想文コンクールの応募作品を直接の研究対象とした事例はさほど多くはない。いくつかの課題作品を対象とした質的研究（米谷 2010, 米谷 2013）や、応募作品に関する書誌情報レベルの統計を行った量的研究（米谷 2008, 米谷 2012）はあるが、応募作品に計量テキスト分析を加えてその内容の検討まで踏み込んで定量的な調査を実施した例はない。

本研究の構想と同様、児童・生徒の作文を対象として形態素解析を行い、その結果を作文指導に役立てようという試みはいくつか実施されている。鈴木（2013）は、中高一貫校の1年生（中学1年生）から5年生（高校2年生）を対象とし、手書きの作文を形態素解析して分析することにより、作文指導の客観的評価指標としての有効性を確認する研究を行った。その結果から鈴木は、分析から抽出されるいくつかの指標においては、学年進行とともに変化するものと不変なものがあり、そ

れらを鑑みることで適切な作文指導を行うことができるのではないかと指摘している。同様のアイデアで、テキストマイニングを作文指導に用いる研究(小川ら2012)も行われている。児童の作文評価において、評価項目を客観的に定めて適用するための研究例(梶井2001など)もいくつか存在する。

また、中尾(2009)は、大学生のレポート(アカデミック・ライティングの初期段階)を対象として、語彙の統計量と総合評価の関連性に関する分析を実施した。この研究は、作文の自動評価を実現するための予備的な研究と位置づけられている。なお、今回は日本語の読書感想文を対象としたため日本における関連研究を中心に紹介したが、当然ながら海外でも同様の研究は行われている。言語が異なるため直接の比較はできないものの、根底にある考え方は参考になる点も多い。海外の動向まで含めた作文の自動評価に関しては、石岡(2008)が参考になる。

3. 仮説設定

高く評価される読書感想文と、そうではない読書感想文にはどのような差があるのだろうか。小学生を対象とした読書感想文の書き方(宮川2010)によれば、「読書感想文は、『読解力』をつけ、『自分の意見・理想』を発展させていくためにある」という。また、赤木(2009)は「読書感想文とは、その感想を読んだ人が『なるほど～、この人はこの本を読んで、こう思ったんだな～』と納得できる“筋の通った日本語”が書けていればいい」とする。このような指針に従って書かれた読書感想文は本当に高く評価されているのか。

上手に書けていると評価された作品と低評価の作品を客観的に比較することで、高く評価される読書感想文の特徴を明らかにしたい。本研究では、読書感想文の優劣を分ける相違点として、以下の2点を調査仮説として設定した。

- 高評価の読書感想文と低評価のそれでは、内

容の記述に明確かつ客観的な差がある

- 同じく、書き方に関しても差が存在する

3.1 記述内容に関する相違

八王子市の読書感想文コンクールでは、担当する図書館員に加えボランティアの協力を得て、応募された全作品を審査する。審査は、一次審査、二次審査を経て、入賞作品が決定される。

応募作品が多数に及ぶため、一次審査では、審査員が作品を読みA～Dの4段階で評価を判定する。評価基準は設定されている¹⁾とはいえ、審査員が主観的に審査するため判定に多少のばらつきが含まれることは否めない。そのため、微妙な判定状況においては複数人の判断を仰ぐ場合もある。

上記の判定方法で分類された高評価作品と低評価作品について内容に関する分析を加え、審査員の判断は本当に妥当であるのかを確認したい。そこで、一定数の作品を対象として、高評価作品群と低評価作品群をそれぞれ計量テキスト分析することにより、差異を明確に示すことを考える。具体的には、共起ネットワーク分析を行うことで、その差を明示することを試みる。

3.2 記述の外形的な相違

読書感想文コンクールの規定では、応募作品の長さが定められている。小学校低学年の部では400字詰め原稿用紙で1～3枚、高学年の部で同じく2～4枚、中学校の部で3～5枚である。しかし、なかには苦勞の末に最低の分量に到達しない作品も稀に応募されている。具体的には原稿用紙2枚しか書けていない中学生による作品などである。また、しばしばみられる状況としては、なんとか原稿用紙3枚以上という条件を満たそうと、3枚目の原稿は1～2行で終了というパターンもある。

作文が苦手な児童・生徒が、無理に応募させられている状況だと推察されるが、たいがい、そのような作品は高評価とはなりにくい。そのため、全体の長さを基準として判断するだけでも、高評

価と低評価には差が存在すると考えられる。

さらに、作文が苦手な児童・生徒による作品に特徴的と考えられる外形的な特徴として、1つ1つの段落が短い²⁾というものがある。その背景には、できるだけ書き飛ばすことで規定の分量を満たすようにしようという彼らなりの工夫があると考えられる。

このような外形的な差異が本当にあるのか、それらは評価に影響を与えているのかという点について、やはり高評価作品群と低評価作品群のデータを定量的に比較することにより、明らかにすることを試みる。

4. 分析の手順

前述の仮説を明らかにするために、分析を以下の手順で実施した。

1. 過去の応募作品から、高評価の作品と低評価の作品を抽出する。さらに、抽出した作品をすべて電子データ化する。なお、電子データ化の対象は、本文のみ³⁾とする。
2. 形態素解析を加え、単語の出現頻度を計算する。
3. それぞれの作品群を対象に、共起ネットワーク図(共起ネットワークグラフ)を作成する。
4. それぞれの作品群を対象に、段落の長さに関するヒストグラムを作成する。

2.の結果および3.の手順で作成された図から、内容の特徴を判断することができる。また、4.の手順で作成されたヒストグラムから、外形的な特徴を判断することが可能となる。

4.1 応募作品の抽出と電子データ化

高評価作品群は、平成24年度から平成28年度に実施されたコンクールの優秀作品(入賞作品)51点を対象とした。これらの作品は、八王子市のウェブサイトにも優秀作品として掲示されているため、オンラインで電子データを入手することができる。なお、PDF形式のフォーマットで公開され

ているため、公開データに対してテキストデータ化する処理を加え、分析にはもとのテキストデータを用いた。

公開されているデータは高評価作品群のみであるため、比較対象の低評価作品群は、別途、審査済みの一般作品から抽出した。抽出した作品は、平成29年度において一次審査でC~D判定を得たもののうち、長さが極端に短いものを排除した残りから47作品を選出した。なお、47作品という中途半端な数となった原因は、当初50作品を対象として電子化したが、そのうち3作品で問題が発覚したためである。本件については、別途、後述する課題の項で補足する。

応募作品はすべて児童・生徒が手書きで原稿用紙に綴ったものである。したがって、分析を加えるにあたっては、これらの作品を電子化しなければならない。低評価作品群は電子化されていないため、手作業によりテキストデータ化を実施した。今回、着眼点は「使われている言葉にどのような特徴があるか、どのような使われ方をしているか」という点である。したがって、誤字や脱字に関する指摘は、今回の分析では対象外とした。具体的には、テキストデータ化の作業では誤字や脱字を修正せずそのまま電子化している。

4.2 単語に関する出現頻度の計算

テキストデータ化したそれぞれの作品に対して、形態素解析を行い、使われている単語の特性について分析する。形態素解析で品詞に分解したのうち⁴⁾、名詞と形容詞を抽出、作品群全体で使われている単語数で正規化し、出現頻度を計算した。なお、形態素解析器にはMeCabを用い、そのシステム辞書としてNEologd(佐藤ら2016)を用いた。

出現頻度について、高い出現頻度を持つ単語を、高評価作品群と低評価作品群で比較することにより、単語の使われ方に関する分析を加える。

4.3 共起ネットワーク図の作成

各単語の出現頻度を計算するとともに、共起関係についても分析を加える。

単語の共起関係とは、同じ段落に含まれているか否かの関係である。例文として、図2に示すような2つの段落を考える。

この例において、「日本語」、「英語」、「例文」といった単語に注目されたい。図2においてゴシック体で表記されている単語である。

「例文」と「日本語」、「例文」と「英語」は、それぞれ同じ段落で使われているため、それぞれに関しては「共起関係がある」とされる。一方、「日本語」と「英語」という単語は、それぞれ別の段落で使われており、同じ段落では出現しない。したがって、「日本語」と「英語」という単語の間に「共起関係はない」とする。

共起関係がどれだけ発生したかの確率を共起確率という。出現頻度の高い単語を各ノードとし、一定の値以上の共起確率が発生した関係性を線（アーク）で結ぶことにより、共起ネットワーク図を描くことができる。

図2 共起関係を説明するための例文

これは日本語の例文です。例として、日本語の難しさを指摘してみます。「象は鼻が長い」、さてこの文の主語は何でしょうか？日本語にはこのような曖昧さがあります。

英語の例文では、よく「The quick brown fox jumps over the lazy dog.」というものが使われます。この例文には英語で使用する文字が全て使われています。

4.4 段落の長さに関する分布の図示

高評価作品群と低評価作品群のそれぞれの作品について、段落の長さを集計する。それぞれのグループで段落の長さがどのように分布するかをヒストグラムを描くことで比較する。仮説に従えば、低評価作品群では短めの段落が比較的多く、高評価作品群では長めの段落が多くなるという傾向が

予想されることになる。

5. 分析結果と考察

以下、高評価と低評価、両作品群を分析した結果について論じる。

5.1 単語の出現頻度に関する考察

表1に、高評価作品群を対象として求めた頻出単語上位10個を基準とした単語の出現傾向を示す。高評価作品群では「私」という単語が最も用いられており、その出現確率は3.71%であった。「私」以下、「自分」、「人」、「本」という言葉が続く。

表1右側のカラムは、それぞれの単語が低評価作品群でどのように使われていたかを示すものである。低評価作品群では、「本」という単語が最も出現頻度が高かった。表中、下線で示している数値は、それぞれの作品群において最頻出単語であることを示す。表1から、高評価作品群で出現頻度の高い「私」や「自分」という単語が、低評価作品群ではそれほど使われていないことがわかる。

なお、低評価作品群における出現頻度の高い単語上位10個のうち、表1に含まれていない単語は、「話」、「すごい」、「物語」、「おもしろい」であった。

表1 高評価作品群を対象とした出現頻度の高い単語上位10個

単語	高評価作品群 [%]	低評価作品群 [%]
私	<u>3.71</u>	1.62
自分	2.33	1.24
人	1.95	1.47
本	1.65	<u>3.27</u>
言葉	1.22	0.47
ない	1.20	0.63
それ	1.12	0.76
何	0.98	0.38
今	0.91	0.44
気持ち	0.75	0.27

5.2 単語の共起性に関する考察

続いて、頻出単語の共起性を可視化するために、両作品群に関して共起ネットワーク図を描いた結果を図3に示す。左が高評価作品群、右が低評価作品群の共起ネットワーク図である。なお、ネットワークのアークを描くための共起確率に関するしきい値は、高評価作品群が0.075、低評価作品群が0.03と、グラフの見やすさを考慮して異なる設定にした。各単語を結ぶ直線の近くに示されている値が、直線の両端に位置する単語の共起確率を示す。

図3において、各ノードは出現頻度の高い上位15単語が抽出されている。また、出現頻度の高い単語については濃い色で表現した。出現頻度および共起性を鑑みると、濃い色、かつ、ネットワークの中心に配置される単語が「重要な単語」とであると判断できる。

図3では、「私」、「自分」、「人」、「本」、「それ」という単語群が相互に結びついた1つの単語群を構成しているという構図を読み取ることができ、それは両作品群の共起ネットワーク図で共通にみ

られる特徴であることがわかる。しかし、中心となっている単語がそれぞれで異なっている。

高評価作品群においては「私」という単語が最も出現頻度が高いと既に述べた。それだけでなく、同単語は共起ネットワーク図の中心に位置している。対して、低評価作品群では、ネットワークの中心に位置している単語は「本」である。

これらの結果は、読書感想文を書かせるときに「本のあらすじを紹介して終わりではなく、自分の考えや体験を書きましょう」と教える教育方針に合わない。宮川(2010)も「あらすじを書いて、感想をまとめて、『楽しかった』とか『おもしろかった』という程度の言葉を配置して、それで終わりでは、なんの意味もない」と指摘している。すなわち、高評価な作品では本を題材にして「私」がどう考えたかが記されているという状況を共起ネットワーク図から読み取ることができ、一方の低評価作品では、「本」がどうだったかという記述、つまり、あらすじの紹介が多いという状況を共起ネットワーク図から読み取ることができる。

図3 共起ネットワーク図（高評価作品群（左）と低評価作品群（右））

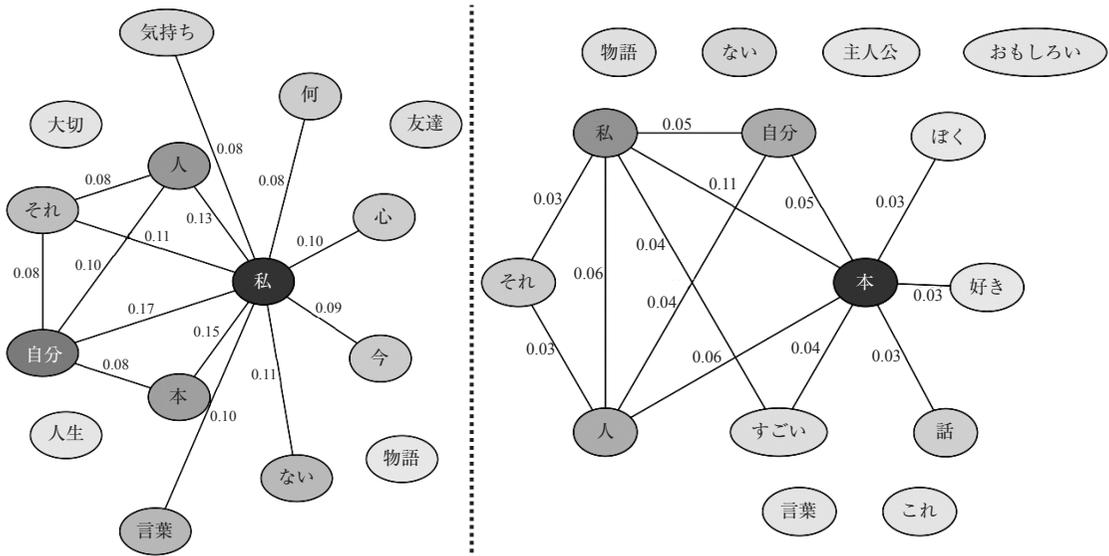
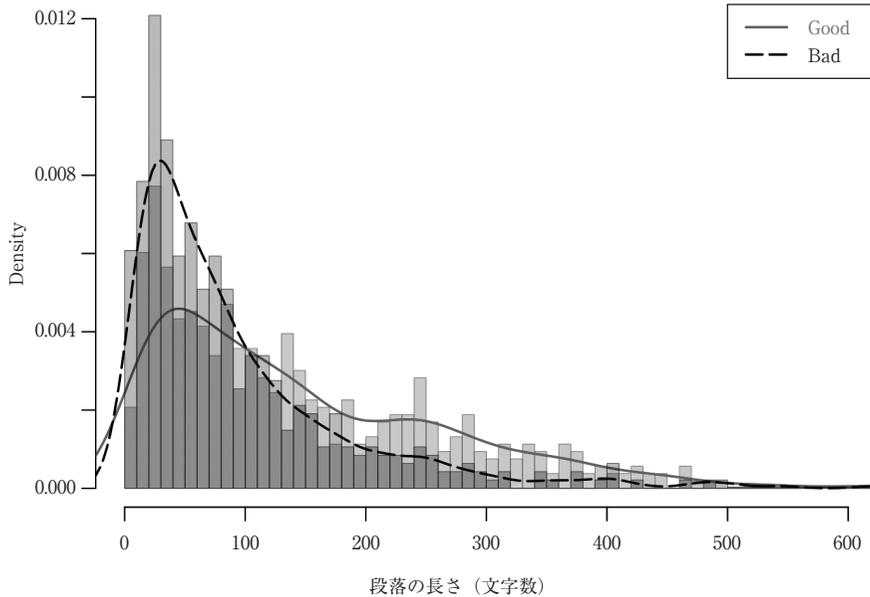


図4 段落の長さに関する分布



5.3 段落の長さに関する考察

外形的な相違を比較するために、段落の長さを集計してヒストグラムを描き比較した。結果を図4に示す。

このヒストグラムに関して、明らかに、高評価作品群と低評価作品群の違いを確認することができる。100文字程度の段落を境にして、高評価作品群ではそれよりも長い段落の分布が厚く拡がっており、一方の低評価作品群では100文字以下の短い段落の分布が多いことを読み取ることができる。

この結果から、低評価作品を執筆した児童・生徒は作文が苦手であり、段落を短くして書き飛ばすことで行数を稼ごうとしているという状況が示唆される。

6. 作業で明らかになった課題

低評価の作品群データを準備する過程において、当初、50作品を対象にしたと説明した。しかし、実際に分析対象として使用できたデータは47作品

であった。3作品に問題が含まれていたからである。その問題というのは、剽窃の発覚である。

3作品のうち、2作品において、ほぼ同じ文章が綴られていた。もっとも、その2作品はどちらかがどちらかを写したというものではない。3作品いずれも、Wikipediaなどインターネット上に公開されている文章からの引き写しであった。程度の差こそあれ、50作品のうち3作品に、いわゆる「コピペ⁵⁾」が発覚したというのは、何らかの対処が必要な状況であろう。

本問題に関しては、図書館を通じて対象の学校へ連絡してもらった。学校現場での指導について、改善が期待されるところである。

また、対象とした読書感想文の元データがすべて手書きによるものであった点も、作業の効率を阻害する大きな原因となった。すなわち、児童・生徒が手書きで応募した原稿を分析するためには電子化してテキストデータ化する事前準備作業が不可欠であるが、この作業を自動化する手順が難しいという問題である。

光学式文字読み取り装置 (Optical Character Reader, OCR) の活用も考えられるが、児童・生徒の手書き文字は一般的に読みやすさにばらつきがあり、活字であればかなりの精度で読み取ることができる OCR であっても児童・生徒の手書き文字はほぼ認識することができない。機械学習を用いた読書感想文の評価のための予備実験 (飯尾 2017) における議論では、よい作品を書く児童・生徒は、字も丁寧に書き、読み取りやすい字を書くのではないかと仮定から、原稿をまるごと画像として読み取り、そのデータをもって機械学習による判別器にかけるというアイデアも提案されたが、その案は未だに検証されていない。いずれにしても、応募作品のテキストデータ化に関する効率化の検討は、本研究を進めるうえでの喫緊の課題である。

家庭環境および学校現場の IT 化が進み、児童・生徒が電子デバイスを用いて文章を書くことに慣れ親しみつつある昨今では、手書きによる作品だけではなく、電子的な応募も受け付けるようにコンクール実施側の体制を整えることも検討の余地があろう。ただし、電子的な作品提出に関しては、前述のコピペ問題がさらに顕在化するリスクがある。電子的な作文においては、既存の文書からのコピペが手書きよりもはるかに簡単だからである。この点に関しては、著作権に関する意識や、剽窃は犯罪であることを適切に認識させる指導をより強化する必要もある。

7. おわりに

本研究では、八王子市図書館が実施している読書感想文コンクールへの応募作品を対象として、評価の高い読書感想文とそうではない読書感想文にはどのような相違点があるのかを、客観的に明らかにすることを試みた。高評価作品群として例年の入賞作品を集め、一方の低評価作品群としては平成 29 年度に実施されたコンクールへの応募作品のうち一次審査で評価の低かった作品を抽出した。

それぞれの作品群について計量テキスト分析を加えた。電子化した作品を形態素解析で品詞に分解し、単語の出現頻度を計測したうえで共起確率を計算、共起ネットワーク図を作成した。その結果、高評価作品群では対象の本を題材にしたうえで自分について記述している状況が明示され、一方の低評価作品群では単なる本の紹介に終わっている状況であると解釈できる共起ネットワークが示された。これは、従来いわれてきた「読書感想文はたんにあらすじを書いて終わりではなく、自分の気持ちや経験にてらして自分の意見を書きなさい」という読書感想文指導と一致する。

また、外形的な定量的分析として段落の長さについての比較を行ったところ、低評価作品群は比較的短めの段落で読書感想文が構成されている傾向が見出された。

今回は、極端なケースとして高評価作品群と低評価作品群を直接対比させて比較したため、その差は大きく、わかりやすい結果を示すことができた。今後、実際の読書感想文作成指導にフィードバックするためには、その中間段階についても考察する必要があるだろう。すなわち、評価の低いレベルの作品しかまだ書けない児童・生徒をいかにして中位のレベルまで引き上げるか、中位レベルの児童・生徒をいかに高評価作品を書くことができるレベルまで引き上げるか、それらに対する示唆を与えるには、今回のような比較だけではなく、段階的にレベルを評価できるような指標を検討しなければならない。

この読書感想文評価に関する研究の最終目標は、現在、多大な労力をかけて実施している読書感想文の評価判定を、できるだけ自動化することである。ただし、その副産物として発生しうる読書感想文指導の評価基準は、国語教育の現場に随時フィードバックして活用していただきたいと考えている。したがって、この段階的に評価できるような評価基準の策定も、前節で述べた電子化に関する課題も含めて、今後の課題として残されている。

る重要なテーマである。

- 1) 基準は非公開のため、本論文では詳しく述べない。
- 2) 稀に、段落の区切りが一切なく、最初から最後まで1つの段落で構成されるという逆のパターンがみられることもある。
- 3) タイトルと応募者名は対象外とする。
- 4) 非自立語は削除する。
- 5) 手書きで引き写しているので、正確には、「コピー・アンド・ペースト」ではなく「コピー・アンド・ライト」である。

参考文献

- 赤木かん子, 2009, お父さんが教える読書感想文の書き方, 自由国民社
- 飯尾淳, 2017, 読書感想文コード化の試み, 電子情報通信学会, 第37回サイバーワールド研究会, CW2017-09, 9-12
- 石岡恒憲, 2008, 小論文およびエッセイの自動評価採点における研究動向, 人工知能学会誌 23 (1), 17-24
- 岩田佳菜子, 2018, 西南学院高等学校における読書感想文指導について, 学校図書館 (811), 53-55
- 小川修史・田中昌史・掛川淳一・森広浩一郎, 2012, 児童の変容把握を目的とした小規模校におけるテキストマイニングの有用性に関する検討, 日本教育情報学会, 教育情報研究 27 (3), 3-14
- 梶井芳明, 2001, 児童の作文はどのように評価されるのか?—評価項目の妥当性・信頼性の検討と教員の評価観の解明—, 教育心理研究, 49, 480-490
- 門島伸佳, 2017, 自己の成長を実感させる読書感想文の書き方指導, 富山大学国語教育 (42), 19-28
- 川北洋子・高橋道子, 2010, 国語の発展学習としての読書感想文指導・それを支える図書館運営, 学校図書館 (716), 47-50
- 佐藤敏紀・橋本泰一・奥村学, 2016, 単語分かち書き用辞書生成システム NEologd の運用: 文書分類を例にして, 電子情報通信学会技術研究報告, 116 (379), 73-86
- 鈴木一史, 2013, 文章作成能力と語彙分析: 学年発達による語彙変化と文章特性, 全国大学国語教育学会発表要旨集 124, 108-111
- 中尾桂子, 2009, 語彙の統計量と総合評価の関係: 作文評価の基準特定にむけて, 大妻女子大学紀要, 文系 41, 146-129
- 成家雅史, 2013, 読書感想文再考: 「感想」文指導で何を指導するか (国語科), 東京学芸大学附属小金井小学校研究紀要 35, 25-28
- 野口久美子, 2009, 小学校・中学校における読書指導の実践に関する報告記事の分析: 全国学校図書館研究大会を事例として, 三田図書館・情報学会, Library and information science (62), 111-143
- 野口幸司, 2017, へき地小規模校の読書感想文指導, 学校図書館 (799), 12-14
- 船津涼子, 2012, 読書感想文の書き方指導の試み, 全国大学国語教育学会発表要旨集 122, 39-42
- 宮川俊彦, 2010, 読書感想文書くときブック, ディスカヴァー・トゥエンティワン
- 米谷茂則, 2008, 戦後の高校生が読み継いできた作品—全国読書感想文コンクール入選の読書対象作品の集計及び5月読書の統計から, 日本読書学会, 読書科学, 51 (2), 74-84
- 米谷茂則, 2010, 児童生徒は『夏の庭 The Friends』の読書で何をどのように考えたのか: 全国読書感想文コンクールの入選感想文分析から, 東京学芸大学, 学芸国語教育研究 28, 2-19
- 米谷茂則, 2012, 2000年から2009年までの10年間に児童生徒が読書した作品: 全国読書感想文コンクール入選の読書対象作品の集計及び5月読書の統計から, 日本読書学会 読書科学 54 (1・2), 29-42
- 米谷茂則, 2013, 高校生の批判精神に期待する: 全国読書感想文コンクールにおける『車輪の下』, 『異邦人』, 『こころ』, 『人間失格』の入選感想文分析から, 東京学芸大学, 学芸国語教育研究 31, 39-23